

む つ み

2 8 2

日本国語教師の会「樺の会」

第五十四回 日本国語教師の会「樺の会」宇都宮大会案内号

例年、関東近県で開催している夏季合宿研究会（通称…全国大会）ですが、今年度は第二十一回日光鬼怒川大会以来、三十数年ぶりの栃木県での開催となります。

東京から鈍行で約二時間の距離にある宇都宮市の国語教育は、宇都宮大学教育学部附属小学校を中心として、よりよい授業に向けての歩みを進めています。

こうした地元の国語教育の黎明期を支えてくださったのが、当時、宇大附属小に勤務されていた、柏村政先生、川村滋先生、柴田悦子先生です。三名に代表される当時の先生方が、よりよい実践と、実践を高め合う仲間を求めてたどりつたのが、ここ「日本国語教師の会（樺の会）」でした。今から三十年以上前のこととなります。

時を隔てて六年前、小生がお茶の水女子大附属小学校の岡田博元先生に発表のお誘いをいただいたことをきっかけに、宇都宮は日本国語教師の会との再会を果たすことになりました。ここで私は、この会が宇都宮の国語教育を拓いた先輩方

とつながりがあったことを知りました。それは、国語教育について語り合うこの良き熱を、宇都宮の仲間と少しずつ広げていこうとしていた矢先のことでした。

宇都宮大会は、このような文脈を踏まえ、国語教育実践研究の熱を時を超えて掘り起こすとともに、新たな時代を拓く実践者との化学反応を期待するものです。ここで、新たな時代を拓く実践者に課せられた課題について触れておくことにします。

本大会の副主題「学び続ける主体を育てる」は、新学習指導要領が提示する問題意識に共感する立場で設定されたものです。問題意識の中心は、「予測困難な社会」というキーワードに集約されます。AIの進歩とともに巻き起こる経済社会の変貌、情報の爆発的な氾濫、様々な境界（地域・国家等）の融解に代表される、社会全体の加速度的変化を指した言葉が「予測困難な社会」なのです。

こうした社会の加速度的な変化に応じて、自信を変革・成長させ続けられる主体、すなわち「学び続ける主体」を育てることは、実践者に求められる切迫した課題といえるでしょう

う。ここで、目指す対象像を「子ども」ではなく敢えて「主体」とするのは、私たちの実践が、子どもたちの現在ではだげでなく、未来を含めた「学び続ける姿」を射程におく必要があることによります。

本大会は、私たちの目の前に迫った「予測困難な社会」と対峙するため、時を超えた実践研究の熱をつなげようとするものです。そして、関東圏以外の先生方と互いを磨き合える数少ない機会です。どうぞ奮ってご参加をお願いいたします。

(大会事務局長 山中 勇夫)

第五十四回 日本国語教師の会「樗の会」宇都宮大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる国語教育

― 学び続ける主体を育てる国語の教室 ―

主催 日本国語教師の会「樗の会」

後援 栃木県教育委員会(予定)

宇都宮市教育委員会

二 とき 平成三十年八月四日(土)～五日(日)

三 ところ 宇都宮大会教育学部六号館・八号館・学生会館

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350

TEL: 028-649-8172

交通: JR宇都宮線「宇都宮」駅東口よりバス十分

【宿泊】 ホテルニューイタヤ TEL: 028-635-5511

〒320-0811 栃木県宇都宮市大通り2-46

四 日程

【第一日】八月四日(土) 宇都宮大学教育学部 六号館

1 受付 九:00～九:30

2 開会式 九:30～九:50

① 開会のことば 大会事務局長 山中 勇夫 (栃木)

② 挨拶 柏村 政 (栃木)

③ 大会運営の連絡 大会事務局 海老澤 正臣(栃木)

3 はじめの話 九:50～一〇:20

大会委員長 川村 滋 (栃木)

4 研究発表 一〇:30～一二:00

森 健 (栃木) 他一名

5 先達に学ぶ 一三:00～一四:20

柴田 悦子 (栃木) 他一名

6 ゲストの話(記念講演) 一四:30～一六:00

講師 佐藤 由紀子 氏(フリーアナウンサー)

元FM栃木「Radio Berry」

7 記念撮影

8 懇親会 一八：〇〇～二〇：〇〇 ホテルニューイタヤ

【第二日】八月六日(日) 宇都宮大会教育学部八号館・学生会館

1 受付 八：三〇～九：〇〇 (八号館)

2 実践報告分科会 九：〇〇～一二：〇〇

◆低学年分科会

◆中学年分科会 各分科会とも、発表者二名、

◆高学年分科会 指定討論者二名を予定

3 パネルディスカッション 一二：五〇～一五：〇〇

「学び続ける主体を育てる国語の教室」

パネリスト 内丸 友之(茨城) 山中 勇夫(栃木)

渡辺 哲男(東京・立教大学)

4 まとめの話(総括講演) 一五：一五～一五：四五

5 閉会式 一五：四五～

・会代表挨拶

・参加者代表挨拶

・閉会のことば

6 交流の集い 一七：〇〇～

5 参加費等 大会参加費：四〇〇〇円(資料代・会場費等)

地元(栃木県内に勤務校)：参加費三〇〇〇円

学生参加費：二〇〇〇円 当日受付で集めます。

宿泊費：一泊九七〇〇円(朝食食付税込)

懇親会費：五〇〇〇円(予定)です。

6 申込方法 七月二十八日(水)までに、必要事項を記入し、

メールまたはFAXにてお申し込みください。

前述の宿泊を希望なさる方は、七月二十四日(金)

までにお申し込みください。

7 申込先 日本国語教師の会「樺の会」

【HP】 <https://www.keyakikokugo.com>

【メール】 info@keyakikokugo.com

8 研究発表等 研究発表(八月五日午前若干名) 分科会実践報

告(八月六日午前、上・中・下学年各若干名)を

ご希望の方は六月二十二日(土)までに、テーマ

や内容を明記して、お申し出ください。原則とし

て受付順に決定します。大会事務局より依頼する

こともあります。

発表要項はA4用紙を縦長、縦書きにして四枚以内にまとめ、七月二十日(金)までに、申込先にお送りください。期日に遅れた方は、当日一〇部ご持参ください。

九 その他

①当日受付もしますが、参加者数により資料をお渡しできないことがあります。

②受付場所は、八月四日(土)が教育学部六号館、五日(日)が教育学部八号館となっています。お間違いのないよう、お気をつけください。

【大会役員】

大会委員長 川村 滋 (元宇都宮市立宮の原小学校)
大会事務局長 山中 勇夫 (宇都宮市立御幸小学校)
大会副事務局長 海老澤正臣 (宇都宮市立豊郷中央小学校)
大会事務局 秋山 誠 (前浦安市立美浜南小学校)
岡田 博元 (お茶の水女子大学附属小学校)
片山 守道 (お茶の水女子大学附属小学校)
名取 俊夫 (練馬区立八坂小学校)
松本 正子 (前十文字学園女子大学)
廣瀬 修也 (お茶の水女子大学附属小学校)
横内 智子 (お茶の水女子大学附属小学校)
若林 富男 (江戸川学園取手小学校)
石塚 諭 (宇都宮大学)

【実践報告】

領域をつなぎ、考えをつなげることばの学習

～ライティングワークショップを用いた実践

「自分のことを書いてみる」(二年)から

お茶の水女子大学附属小学校 岡田博元

1 「聴く」と「書く」をつなぐ

子どもたちが聞き手として学習に参加しているとき、その表出は多様である。応答をその場で言語化できる子、視線や表情から熱心が伝わる子、話されていることを懸命に咀嚼しようとしている子など、その場だけで彼らがどのような「聴く」を行っているかを判断するのは難しい。ただ、多様な姿に共通しているのは、表出の有無にかかわらず、アクティブな聴き手は常に思考しているということである。

本校国語部では、「聴く・考える」をテーマに挙げている。「考え」も「聴く」と同様、他者が把握しにくいものである。つまり、「聴くこと」によって促された思考をどう見とるか」が課題として挙げられる。本実践では、その一つの試みとして、複数領域で思考・表現を合わせて見とることを考えた。

「聞くこと」の活動で話題になった問題意識が子どもの中にとどのような形で内化し、「書くこと」の表現として表れるか。書いたものを推敲する過程で、書き方がどのように更新されたのかを見ていく。その手立てとして、ライティングワークショップの考え方を用的ることとした。

2 低学年版ライティングワークショップ

(1) ライティングワークショップとは

アメリカを中心に、実践が重ねられている学び方で、子どもを成長していく一人の書き手として捉え、自分で書く題材を選び、作文のプロセスが繰り返される中で次第に「書くこと」ができるようになっていくという考え方に立つ。

個別的な作文指導過程(表1)で重要とされる①のモデリングや③の足場かけを、友だちや教師と対話することで行っていくことが、 \equiv の手順に組み込まれている。これにより、書きたいことを声に出し、自分の想いや表し方を確かめていくことができる。

表1：認知的師弟モデルによる作文指導
(森敏明 2002)

モデリング	模範を示し、観察して学ぶ
コーチング	教師が具体的に指導する
スキヤフオールディング	支援しながら独力で進める
フエイディング	支援を少なくし自立させる

(2) 本実践での学習過程

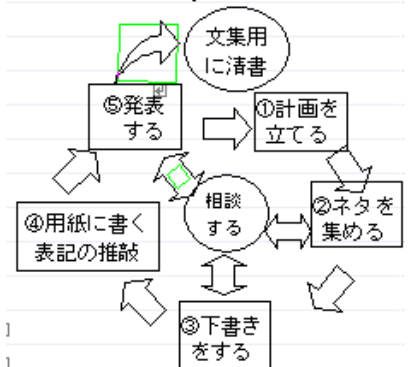
本実践では、書き手が友だちの声を受け止めながら、「書く対象」や「書き表し方」についての意識を、少しずつ広げていくことを大事にしている。様々な声にふれる機会を設定するために、図1の推敲(相談)が様々な場面で行われるようにした。具体的には、図1のように、書く過程の中心に相談を位置付け、取材段階・作品化した段階・発表の段階という三つの場面で、他者とともに推敲する場面を設けた。

低学年という発達段階を考え、

複数のモデルと出会いながら、①書く対象について、②書き表し方について、③推敲(質問)の仕方について、全体でモデリングの機会を多くもつようにした。

「書き貯めた中から一つを選んで文集に掲載すること」をゴールとし、一つの作品を書き上げたら終わりではなく、このサイクルが継続していく。

図1：本実践での学習過程



3 学習指導計画(帯単元 全三十時間)

- (1) 目標や計画を考え、表現形式を決める
- (2) アイディアを出し、組み立てる
- (3) 下書きをし、書き足す
- (4) ペアで読み合い、質問や付け足しをする
- (5) 付け足し・修正をする (6) 発表をする
- (7) 清書・校正をする
- (8) 次の作品の目標や計画を考える

※二十時間の中で、テーマを変えながら(1)～(8)をくり返し経験するようにした。毎時間の展開は、①発表と共同推敲 ②個人の学習 ③相談での共有を基本とする。

4 対話と作品の変化

本単元では、子どもたちが作品をもとに対話することを通して、「対象の理解」と「表現方法の理解」が進み、整理されることを意図している。例として人気アニメ「ポケットモンスター」を題材とした、D児の変容を取り上げる。

この日は、「好きなテレビはポケモンで、メガシンカについて知らせたい」というD児が下書きを発表し、聴き手が気付いたことを話し合う形で行った。

D児は整理して書くことは得意ではなく、最初に書いて発表したのが表2である。好きな理由が述べられたあと、このゲームをプレイしたことのある人にしか分からない用語や固有名詞が並んでいる。また、「強い」「強い」という表現が、くり返し使われていることから、この時のD児には書いたものを読み直す習慣がないことがわかる。

表2：D児のはじめの話

ぼくが好きなテレビはポケモンです。なぜなら、ポケモンは「えいゆう」「でんせつ」「まぼろし」が好きだからです。その理由は、強いし、ゲッコウガをえいゆうゲッコウガになると強い強いです。強いし、メガシンカすると強い強でこうげきがアップします。強いし、メガシンカはきづながないとメガシンカできません。ナイトがないとメガはできません。

メガするポケモンは、「レックザ」「リザードン」「カメックス」「フシギガス」「ペラノスピアー」「ハッサムホームンダルカリオラダラー」「ジュブトルバーシモン」「メタグロスミュウツー」「オニゴロービジュット」です。ナイトを見つけてメガシンカができます。

表3は、この文を読み上げたD児の発表に続く、子どもたちの

表3：D児の話への反応

C1…最初から「えいゆう」とか「デンセツ」と言ってたけど、ポケモンを知らない人がいるので、ポケモンが何かを始めて書いた方がいい
T…ポケモンって短く説明するには何て言った方がいい？
C2…モンスターを育てて、モンスター同士で戦わせるゲームで、今はXYZが…
C3…ポケモンの名前がたくさん出たけど、途中でわかんなくなっちゃうから、何個かにして。
C4…メガシンカのことを書いてあったけど、ちよつとわからなかった。
C5…メガシンカっていうのは？
D児…メガシンカっていうのは…（言葉につまる）
C6…何かのポケモンを使って説明すれば、ゲッコウガみたいに。
T…じゃあ、例えばで説明して。
D児…えつと、ミュウツーだったら…（後略）

反応である。D児の発表が「どうやったたらわかりやすくなるか」を考えながら、気になった点を挙げています。

「わかりやすさ」に着目して意見が言えるのは、これまで、話し言葉をみんなので書き言葉に直していく「共同推敲」を繰り返してきたことによつて、子どもたちが獲得していた話し方といえる。

教師は、話し合いの中で挙がった指摘に関わる「作文のワザ」を視覚化するために板書した。この時は、子どもたちの話の中から「くとは」「教をしぼって」「例えば」という作文のワザを抽出して、他の子どもたちにも意識できるようにしている。

誰かが気付いたことに対して、発表者（D児）が答えるのではなく、別の子がそれについてのアイデアを提示することで話が

展開していく。この場面では、「質問」「言い換え」「提案」を通じて表れた着眼点が「作文のワザ」として意識されることによつて、子どもたちの納得につながっている。D児の作文は、その後このようにまとまった。

表4：D児の作文

ぼくが好きなテレビはポケモンです。ポケモンは、サトシが主人公でポケモントレーナーをめざして、しんかして強くなります。なぜなら、「えいゆう」「デンセツ」「マボロシ」が好きだからです。
 ゲッコウガは「えいゆうゲッコウガ」になります。強いし、メガシンカをすると、こうげき力がアップします。
 メガシンカは、きずながないとメガシンカできません。ポケモンナイトがないとできません。
 メガシンカするポケモンはレックウガ・リザードン・カメックスなどです。あとなんともいません。
 メガシンカは、タイプによって違います。ナイトを見つけてメガシンカできます。ポケモンは、しんかしてわざをおぼえます。
 例えば、ミュウツーはミュウツナイトYをつかうと、こうげきがアップしてメガミュウツYになります。

最初の話と比べると、「ポケモンとは」「数をしぼる」「例えば」といった、聴き手からの声を取り入れた文章になっており(表4 傍線部)、劇的に分かりやすくなっている。

D児はこの文を一人でまとめ直したのではなく、ポケモン好きの友だちF児と楽しく対話しながら書き上げている。誤字脱字や表記の重なりが多いD児が「作文のワザ」をそのまま自分の文章に転用することは難しい。どんなワザを使えばいいかは話し合い

によつて意識できても、「どのように使えばいいか」まではわからなかっただろう。

相談によつて「どのように使うか」がはっきりし、F児によつて重複が指摘されたり、説明が補足されたりしていることも踏まえると、出来上がった文はD児とF児の合作とも言える。

5 考察 「作文のワザ」を足場に協働の知が生まれる

本単元での作文には、D児の例のように、自分一人の手で書き上げたとは言いいきれないものがある。しかし、D児が意識していなかったがF児は知っていた「くとは」という作文のワザは、発表と質問によつてみんなが共有するものになっていった。

さらに、「作文のワザ」をもとにしたF児との相談によつて、D児が何を伝えたいのが、言語化されていく過程がわかる。D児はF児という他者を介して、自分が書きたかったことをはっきりと意識することができるようになっていった。

本単元の単元名は「自分のことを書いてみる」であるが、書いてみたことで、他者とながら、言葉を通して自分と向き合い直す過程だと考えることができる。

◇◇ 会案内 ◇◇

日本国語教師の会 櫛の会」の研究でめざすもの

日本国語教師の会 櫛の会」は、二十一世紀の国語学習の在り方の探求する研究集団である。

子どもたちが 自ら国語の力を獲得する学び」の姿を求めて、東京、千葉、埼玉、神奈川、茨城から会員が都内の会場校に集まって来る。若手から中堅、そしてベテランまで、幅広い層の教員が、常に三十名近く参加する。

研究は厳しく、人間関係は和やかに』を合言葉に毎月一度集まり、互いに学び合っている。二〇一六年五月には月例会が四五〇回となり記念すべき五〇〇回も視野に入ってきている。

日本国語教師の会 櫛の会」は、故石田佐久馬代表の遺志を引き継ぎ 吾以外皆我師」をモットーに学び続けている。月例会で学んだことをもとに、日本国語教師の会 櫛の会」の全国大会（毎年七〜八月）で、発表する会員も多い。

近年五年間の日本国語教師の会 櫛の会」の全国大会の研究テーマを掲げると、次のようになる。

二〇一四年 第五十回 埼玉武蔵野大会（埼玉県新座市）

ことばを育て人間を育てる ～国語教育温故知新～

二〇一五年 第五十一回 多摩東京大会（東京都立川市）

ことばを育て人間を育てる ～どの子も輝く国語の教室～

二〇一六年 第五十二回 茨城取手大会（茨城県取手市）

ことばを育て人間を育てる

～自ら学び、みんなで学ぶ国語の教室～

二〇一七年 第五十三回 伊豆熱川手大会（静岡県東伊豆町）

ことばを育て人間を育てる ～国語科における深い学び」とは～

日本国語教師の会 櫛の会」の会員は、全国大会のテーマを常に意識しながら、自分で興味関心のあるテーマを設定し、授業実践を通して追求し、年一回月例会で提案することを申し合わせている。